
音楽室の恭子さん

Pomme

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

音楽室の恭子さん

【Nコード】

N9530Y

【作者名】

Pomme

【あらすじ】

「キミ、なかなか上手いわね」

そう言って彼女は 恭子はシニカルに笑った。

僕こと三浦秋人は夕方、誰もいない音楽室で一人の少女と出逢う。しかし彼女は音楽室の幽霊で

これは、どこかに落ちていそうな愛しくて切ない物語。

遭う

噂は聞いたことがあった。

「キミ、なかなか上手いわね」

彼女はシニカルに笑う。

『放課後誰もいない音楽室から誰かの歌声が聞こえてくる』

全く信じていなかった訳ではなかった。

「じゃ、これは素敵な演奏のお返しね」

彼女は静かに目を閉じて、凜とした音を紡いでいく。
どこかで聞いたことあるような美しいメロディだった。

彼女は唄いながらゆっくりと歩み出す。

僕が弾いていたグランドピアノをすり抜けて。
まるで其処に存在しないかのように。

唄い終えた彼女は、くるりと僕の方を振り向く。

「キミ、名前は？」

僕はあまりの非現実的に逆に冷静になっていた。

「
2年B組、三浦 秋人」

「ふーん、ミウラ アキヒト……」

彼女はすどん、とグラウンドピアノに腰を掛け、華奢な足をぶらぶらとさせた。

「アキヒト……うーん……アキтарー……アッキー……」

途端、彼女の瞳が輝く。

「アッキー!!! うんっ、いいわね!!! よしっ、キミは今日からアッキーよ!!!」
彼女は嬉しそうに僕を指さす。

「 私は草薙 恭子。元2年A組よ。よろしく、アッキー!!!」

彼女が笑ったとき、僕は思わず目を細めた。

はつきりと言うと彼女は美人だ。ストレートの黒髪は風が起こるたびさらりと妖艶に輝く。頬は薄桃色に染まり、笑うとぱちくりとした瞳が楽しそうに微笑む。思わず見とれてしまうのだが、僕が目を細めたのはそれが理由ではなかった。

単に、彼女の華奢な体を透き通ってオレンジに輝く太陽が眩しかっただけのことである。

遺言（後書き）

あまり長くならないとは思いますが、連載と致します（*^^）
なるべく早く更新しようと思えます（´・`・´）（ゞ

笑顔

太陽が西に傾き、今は使われることのない第3音楽室も柔らかなオレンジの陽に照らされて不思議な雰囲気醸し出している。

「やつほー、アッキーー！！やつぱり来たわね」

音楽室の入口で頭を抱える少年

三浦秋人に、グラウンド

ピアノの上に腰掛ける少女

草薙恭子はたのしそう

に手を振った。

「……なんでいるんですか」

少年は力なく壁に寄りかかり、黒髪の美しい少女を見る。

「なんでって言われてもねー。ほらー私、音楽室の幽霊だしー？」

彼女は頬に両手の人差し指をあてがって、ニッコリと微笑む。

差し込む夕日に、彼女の影は無かった。

「……ですよねー……」

秋人は自分が昨日見た少女は幻覚だったんじゃないかと思いきこへ足を運んだのだが、その淡い期待はあっさりと打ち砕かれた。

溜め息をつく秋人の姿に、恭子は少しばかり驚いた顔をする

「あら、意外ね」

「……何がですか」

「てつきり悲鳴を上げて此処から走り去っていくんだとばかり思っていたわ」

「……それをやるなら昨日のうちにやっていますよ」

「すっかりタイミングを逃したって訳ね」

「ええ、それに、こんな女子に悲鳴を上げて逃げるほど男は捨てていないですよ」

「あら、分からないわよ？」

刹那、少女は音も無く秋人の目鼻の先に立った。

「……もしかしたら、私がキミを取って喰うかもしれないじゃないかい」

彼女が挑発的に微笑む。

秋人は一瞬驚いたが、すぐに呆れた表情をみせた。

「……触れることもできないのにどうやって喰うんですか」

「……あら、その事は考えてなかったわ。失敗失敗」

恭子はそれまでの空気を壊すように冗談交じりに笑うと、

「キミ、合格」

と彼を指さして花の咲くような笑顔を魅せた。

それは昨日遭ってから今日この時まで、秋人が見た中で一番美しい笑顔だった。

笑顔（後書き）

ノロノロな亀展開ですねー・・・（、、、；）

あ、補足ですが、音楽室は一応第3音楽室とします……………

「音楽室が3つもあるわけないだろー！」的なツツコミはナシでお
願います

溜め息

賑やかな声が遠くから聞こえる。

お昼時になると、普段は暗く沈んだ雰囲気のある第三音楽室も暖かい空気に包まれるようだ。

「……………アッキー来ないなあー」

澄んだ声が退屈そうに呟いた。

さらさらと艶のある黒髪が古ぼけた楽器の間に揺れて見えた。

よく見ると、音が出るかも怪しいような楽器たちの間に美しい少女が寝っ転がっていた。

閉ざされたカーテンの間から差し明るい光が少女の影をつくることはなく、ただ埃にまみれた床を照らすだけである。

「暇だー……恭子ちゃんは暇だぞー……」

音楽室の幽霊として小さな噂の中心となっている幽霊・草薙恭子ちゃんはそのごく暇を持て余していた。

「……………なにしてんの」

購買で買ったパンを片手に、秋人は呆れた目で恭子を見下ろす。

がばつと勢いよく上半身を起こした恭子は、

「アッキーがあまりにも遅いから暇で暇で仕方がなかったんだぞーっ……!」

と拳を振り上げたが、それは秋人の脚を空しくすり抜けた。

「暇って……………僕は暇じゃないんですから……………」

秋人は座り込んでパンをかじる。

「アッキーが暇じゃなくても私は暇なの……!」

「どこのお嬢様だよ」

「女の子は誰でもお姫様になれるのよ!!」

「わがままのレベルがお姫様を超えてるよ」

秋人が溜め息をついた時、外から騒がしい声が聞こえてきた。途端、秋人が楽器の間に素早く潜り込んだ。

「……アツキー何してんの？」

まるで軍人のように素早く無駄のない動きに恭子は呆気にとられる。『いいから静かに!!』

人差し指を必死に口に当てて訴える秋人の恐ろしい剣幕に、恭子は大人しく座っていることにした。

ガチャ

扉が開くと同時に、数人の女子生徒のはしゃぐ声が大きく響いた。

「秋人先パーイ……ってあれ？」

「ほら、ゆったでしょ？こんなところに先輩が来るわけないって」

「でもさっき見たよ!!あれは絶対秋人先輩だったもん!!」

「見間違いでしょー」

「秋人先輩、何気足速いからすぐ見失っちゃうんだよね……」

「また明日にしょっか？」

「だねー・・・」

扉が閉まる音がしたあと、賑やかな声が段々と遠ざかっていき、音楽室は再び静寂に包まれた。

・・・

「・・・つはぁー・・・」

楽器の下で、秋人が緊張感を押し出すように深い溜め息をついた。

「アッキーってばモッテモテじゃないの〜」

恭子がニヤニヤしながら言うと、秋人は苦い顔をする。

「ああやって来られると、すごく目立つしからかわれるから嫌だ」

「あら、乙女心をないがしろにするなんて酷いわ、アッキー」

「その気もないのに優しくするほうが酷いだろ」

「それもそうね」

カラカラと笑う恭子。

もう隠れる必要はないのだが、二人はしばらくの間楽器と楽器の間に挟まっていた。

カーテンの隙間からは青空が覗いている。

「・・・はあー・・・」

秋人はもう一度深い溜め息をついた。

溜め息(後書き)

アッキーは意外と人気があるようです。

王道ですね！いいじゃないか王道！！

一話一話が短いのはご愛きよ)(ry

図書室にて

学校の図書室はあまり人気ひとけがなく、難しそうな本たちが無言で並んでいるばかりである。

そんな静寂な空気の中、

「いよつす!!!秋人!!!」

いきなり耳元から叫ばれた秋人は

「つつ!!!」

バゴッ

「ぶっ」

振り向きざまに持っていた本で殴ってしまった。

「~~~~つつ!!!!!何すんだよ秋人!!!」

涙目で鼻を抑え悶える少年は、

「……なんだ、誠か」
まこと

秋人の数少ない友人の一人だった。

「お前、人が話しかけた瞬間殴るってどーゆーことだよ!？」

「耳元でいきなり叫ぶからだろ。仕方がない」

「数少ない友人を大事にしろよ!!」

「数少ない言うな」

「それはそうと……」

不自然すぎる話題転換。

「なんで昔の卒業アルバムなんか見てんだ？」

「いや……別に」

秋人は古ぼけた本を閉じた。

「なんだよ〜隠すなって〜」

誠が無理やり閉じた本を開こうとする。

「ほんとになんでもねーって」

「秋人君、水臭いぞ〜…………お？」

「…………なんだよ？」

「いや、ほらこの人」

誠が指さした先に、黒髪の少女が写っていた。

集合写真の右上に丸く切り抜かれたバストアップ。シニカルに微笑む少女は、確実に美少女の部類に入る顔立ちである。

「…………!!」

少し幼げであるが、間違いなく恭子であった。

「この人さ、聞いた話だと病気かなんかで死んじゃったらしいぞ。もう4、5年前の話だけだ」

「…………病気？」

「ああ、心臓だか肺だかが悪かったんだとさ。もったいねーな、美人なのに」

「ふーん・・・誠、やけに詳しいな」

「俺の情報網をなめんなよ」

自慢げに胸を張る誠。

「すみません、これ借ります」

秋人は軽くスルーした。

日頃から磨かれた秋人のスルースキルは高度である。

「おい！！シカトすんなって！！」

静寂な図書室に誠の虚しい声が響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9530y/>

音楽室の恭子さん

2012年1月6日12時47分発行